

## 50年の歩みによせて

会長 小山秀一

これまでの学会の足跡を振り返る資料としては、家畜の心電図第16号の中村先生が寄稿した「家畜心電図研究会の歩み」と動物の循環器第20号に載せられた歴代会長等の所感がある。しかし、それ以降に関してはみあたらない。そこで、50周年という区切りに、学会の歩みを編纂することを理事会に提案させてもらった。しかし、研究会設立当時の状況を知る理事はわずかであり、どなたにこの難問をお願いしたら良いか迷ったが、研究会の事務局等を長らく担当しておられた日本獣医生命科学大学名誉教授である廣瀬理事をお願いしたところ、快くお引き受け頂けたことに感謝する。

日本獣医循環器学会の始まりは、1962年に岩手大学で開かれた第1回の家畜の心電図に関する集会からであり、翌年に第2回が開催され、1964年の第3回の開催時に現学会の前身である家畜心電図研究会が正式に立ち上げられた。初代会長には、日本獣医畜産大学の中村良一教授（会長期間：1964～1966年）が就任された。その後、2代目会長として東京大学の野村晋一教授（1967）、そして麻布獣医科大学の北 昂教授（1968～1969）、岩手大学の西川春雄教授（1970～1971）、東京大学の澤崎 坦教授（1972～1979）、日本獣医畜産大学の本好茂一教授（1980～1983）、北海道大学の戸尾祺明彦教授（1984～1987）、麻布大学の高橋 貢教授（1988～1993）、東京大学の菅野 茂教授（1994～1998）、麻布大学の若尾義人教授（1999～2003）、東京大学の局 博一教授（2004～2006）、日本獣医生命科学大学の廣瀬 昶教授（2007～2009）と続き、2010年から私に引き継がれ、家畜心電図研究会から合わせて本年度で50周年を迎えることになった。この間、1984年に名称を獣医循環器研究会に改称している。そして、1991年には現在の日本獣医循環器学会へと発展的改称を行っている。

学術集会である定例学会は、第1回の心電図集会から数えて本年度の大宮で開催された春期合同学会で通算100回目の開催となった。研究会発足当時は、会員数が69名であったと記録が残っている。当時は、生理・薬理等の基礎関係者と大学・研究所等の臨床関係の研究者からの集まりであったようだが、1969年（昭和44年）以降、小動物病院の獣医師の入会が増加した。そして、2000年以降から会員が急増し、現在では総会員数が1000名を超える学会となっている。この会員増の背景には、2001年から発足させた動物循環器認定制度がある。当時の若尾会長の発案により、会員数の増加が止まっていた学会をより魅力を感じる学会へ変革させるために、臨床系と基礎系でワーキンググループメンバーが招集された。そして、両グループ間で検討を重ねた結果、認定制度を管理運営する認定委員会が出来上がっていった。この制度は、日本の大学で十分に教育ができていない獣医循環器の部分で、学会として教育プログラムを組み専門医を目指せるよう再度教育を行うことを目的としたものであった。

日本獣医循環器学会は、これまで順風満帆で来たわけではなく、それぞれの時代で種々の問題を解決しながら現在に至っているものと思われる。本学会は、来年度（2015年）から一般社団法人として再スタートする予定である。本学会の目的は、わが国における動物の循環器学に関する学術の発展と推進に寄与することであり、その目的を達成するためにこれまで以上に責任を持って学会活動を行っていく必要がある。したがって、“温故知新”の言葉通り、心電図をキーワードに結集し日本の動物の循環器領域を開拓してきたこの学会を振り返ることで、さらに充実した学会に発展することを期待する。